

梅々園英千編『烏帽子親』

伊藤善隆
(立正大学)

摘要

出雲・伯耆の八千坊系の俳人たちによる句合の高点句集『烏帽子親』(天明六年(一七八六)序刊。個人蔵)を翻刻紹介する。

キーワード：俳諧、八千坊夷白、『烏帽子親』、梅々園英千、瑞光山清水寺

はじめに

進して、予に羸輪を訂させ」とある。「羸輪」とは勝負の意であるから、判者は英千であったと知られる。

梅々園英千編『烏帽子親』(天明六年(一七八六)序刊。個人蔵)は、出雲・伯耆の八千坊系の俳人たちが企画した句合の高点句集である。本書には八千坊夷白が序文を寄せており、巻末の「願主連名」「発起連中」「集校」「補助」に名前を連ねる二十五名の俳人たちは、いずれも出雲・伯耆の俳人である。すなわち、本文中に記された所付け(俳号の肩書き)によれば、雲州井尻の俳人が七名、母里が六名、安来が三名、久伯・小竹・大塚・松江が各一名、伯州米子・榎大谷・小原・柏尾・夜見の俳人が各一名である。

梅々園英千の跋文には、「遠き国と近きわたりの雪月花鳥喙詠を勸

英千の経歴等は未詳だが、八千坊夷白が刊行した天明七年の歳旦集『正朔吟』(大阪府立中之島図書館蔵。国文学研究資料館「国書データベース」令和7年9月24日閲覧)には、井尻の肩書きで入集する。同書には、「雲州松江井尻両社中」という口絵入りの見出しが立てられ、続く三丁分に松江・母里・井尻の俳人たちの句が載る箇所がある。そこに「梅々社中 全母里」と示して冬英・春瓜(本書にも入集)の句が載るから、母里の俳人も英千の社中であったと判る。英千は井尻・母里(どちらも現島根県安来市伯太町)における八千坊系の指導者的俳人だったのであろう。なお、同書には、他にも本書入集の俳人たちが複数入集しており、本書が八千坊系の俳人たちによる企画だったこと

を裏付ける。

凡例と跋文の記述からは、この催しの高点句の額面を安来の瑞光山清水寺に奉納したこと、さらに額面外の高点句も含めて本書を刊行したことが判る。なお、同様に瑞光山清水寺に奉納された句合として、『弥久母太都』（文化元年（一八〇四）四月序刊。石川県立図書館月明文庫蔵）がある。同書は、芙蓉亭河梁（本書にも「雲霧天塚河梁」として一句入集）の追善として催された句合で、判者は八千坊が務めている。本誌14号では『ひの川集』（橡実庵一枝編、安政五年（一八五八）刊）を、本誌15号では『翁くさ集』（橡実庵一枝編、安政七年刊）を、それぞれ八千房系俳人の活動を示す資料として紹介した。本書も、同様に中国地方、とくに山陰地域における八千坊系の俳人の活動を示すものとして翻刻紹介したい。

なお、本書は国文学研究資料館が公開している「国書データベース」に未登録（令和7年9月24日閲覧）の資料である。

〈書誌〉

書型……刊本。半紙本一冊（縦二二、八cm×横一六、〇cm）。楮紙。

袋綴じ。原裝。

表紙……洪引き原表紙。

題簽……原題簽（ただし、下部は剥落）。左肩双辺（子持ち枠）。

「烏帽子親（剥落）」。

序文……「天明六冬黄鐘日／浪華八千坊」。

版式……無辺無界。每半葉九行（序）、每半葉一〇行（凡例・本文）、每半葉八行（跋）。

字高……一四、四cm（「序」）オ一行目「空をく獸蹄」を計測）。

跋文……「天明^{丙午}とし冬霜月／梅と園英千」。

刊記……「浪華書林 北久太郎町 室齋編 丹波屋傳兵衛」。

丁付……柱に「▲序一（一）・（二）・▲一（二十六）」。

丁数……全二八丁。

備考……「三」ウ一行目「嵐水」の肩書き「雲州井尻」は墨書。

「十六」ウ七行目「鶴子」の雨冠より下の部分は、刷りが不鮮明なため墨書で補われている。「二十四」オ八行目、同ウ一行目の「詠」は、それぞれ「諾」と刷られたものを朱筆で見消ちにし、「詠」と訂正する。

〈凡例〉

翻刻にあたっては、句読点、濁点を適宜補い、改行も適宜改めた。

原本に濁点のあるものは、脇に「（濁ママ）」と注記した。なお組み版の都合で注記していないが、「二十二」オ一行目「治遊^ダ」のフリガナ「ダ」も原本の濁点である。

異体字等は概ね通行の字体に改めたが、一部原本の表記を残した。

原本の各丁片面の終わりに当たるところに「を」つけ、（ ）内にその丁数および表・裏（オ・ウ）を示した。

参考のため、原本の参考図版を末尾に示した。

難読箇所は□で示した。

本文中に、今日の人権擁護の見地に照らして不適当と思われる語句があるが、本書刊行時の歴史的状況を考慮し、底本どおりとした。

〈翻刻〉

烏帽子親

「（表紙・題簽）」

〔見返し〕

空をかける鳥の翅生ひ、岡をわしる獸蹄、またく水に住るいをの鰭をうごかし、おのがさまくくに遊ぶ。誹諧又しかり。されば、八雲たつ御垣の本の梅の園、万葉集の歌の数にひとしきわざごと歌を、右にひらき左りに納て撰し、彼是百ふたつばかり円通の宝場に捧ぐ。されど、今言葉のはななくしう実あるの詠、都て三百亦も、あまりなん。もろ人の玉枝〔「序一」オ〕帯花、なを其編にせむも、ながめなき杯、傍人のせちにいえるも捨がたく、梓にうつすとや。恵みたまえ、あはれみたまえ。かくれたる信あれば顕る威あるもの風やと、やがて題して烏帽子親。

天明六冬黄鐘日 浪華 八千坊

〔表〕〔陽刻〕〔白〕〔陰刻〕

〔「序二」ウ〕

奉納雲陽瑞光山清水寺大悲閣

凡例

- 一、集る処の発句四千弍百有余喙、元亨利貞と分ちて四卷となす。懐紙は其巻との上座へ進之。
- 一、惣四卷の内、高判の句四百四拾九吟、此内にて尤高判の吟二百章を挙て額面となす。
- 一、点数巻頭百三十点、二三軸百点、四より十まで八十五点、十一より二十迄七十五点、廿一より四拾迄七十点、四十一より七十まで六十七点、

梅々園英千編『烏帽子親』（伊藤善隆）

七十一より百迄六十点、百一々百三十まで五十点、百三十一より百六十まで四十七点、〔「序二」オ〕百六十一より百九十九まで四十点、額面の外はあながち甲乙を論ぜず。都而三十五点なり。

一、○□△□□此印は額面の内にて、其巻くの上座の句を知らしむるためなり。

巻頭 鮠一ッうは気初めや岸の梅

月やあらぬ心鵜舟の遠籥

漕入るや花は若葉の嶋がくれ

朝霜や重きが上の思ひなる

目は尻へ逃げて雲間の田植哉

降にけり霜の深艸九十九髪

寒き日や根を下りしたる桔槔

厂金や凡百余の夕気立

夕立の分雷や車井戸

師を慕ふ意味あり峰の花曇

名月や今宵野守歎舟心

爐開や炎箸に狭む蚕

老て待つ恋は若葉の初音哉

葛水は恨の謎や後の朝

雉子鳴や銜の邪む不動坂

筵織る後直りや鹿の声

行春の窪みや奈良の晒し白

樹南斎

理と

全

全

英二

蛸脱

雨夕

揚鳥

蛸脱

里各

理々

仙菓

蛸脱

帰帆

春潮

揚鳥

舎風

思ひ切て撞罪白し山ざくら

全井尻 的羊

面陰の山に魚鳴く月夜哉

伯原米子 柳蛙

識の腰かけ客や冬の蝶

雲岳母里 冬英

夜嵐のふくれて見せる蚊帳哉

雲岳松江 芦笛

泉水の初汐時や楳の華

雲岳松江 帰帆

次ぎの間は臥猪の床か泊り山

石浜福光 隄江

有限りの寺の並し落葉哉

雲岳安梁 兔角

花と月の中ぞ無仏の若葉間

備中松山 嵐岳

撫子や男結びの二本橋

雲岳松江 和風

誰肌の問はず語りや蠅の声

雲岳安田 理と

西山や水へ突出す夏柳

雲岳安田 里英

初霜や手より溢る、小桃燈

全松江 孤柳

穂の鵜の心憎さよ貴船川

全松江 理々

至善の地敷森陰の簾

雲州荒島 碩鼠

岡両や相手欲しがる秋の蝶

雲州荒島 冬英

五月雨や薄を飯りのみるめとも

雲岳松江 理と

残る暑に要抜けし扇哉

雲岳松江 度翠

片われは淵にはまりつ八日月

全本庄 本風

百菊や誰歟通ひ路捨車

全本庄 揚鳥

鵲や明なば是も佐野の橋

伯原稻大谷 湖眼

夕顔や酔も隣から借世帯

伯原稻大谷 湖眼

雨に待つ心競や合歓の花

伯原稻大谷 理々

昼顔や人は扇の片庇

伯原馬佐良 蘭梁

吹や落葉夫レにも濡る、机

伯原馬佐良 理と

暑き日をうらみて葛の雪解哉

伯原馬佐良 蝸脱

「(一)ウ」

「(二)オ」

「(二)ウ」

蛸かなけぶりのた、ぬ御垣守

全

夢寝覚ちぎれくや遠碓

雲州母里 春瓜

実にもこの朧や月の華曇

雨夕

手に障る物を枕や秋の夕

冬英

日最中の思わず凄き夏野哉

雲岳安梁 其垣

涼しさや松の上行月の船

全全津 如舟

汐待の後の寐覚や浦衛

春湖

青柳や懺悔の明の花心

雲岳大塚 河梁

蒟蒻に佳なる味あり朧月

雲岳井尻 風水

稲妻や鳴戸はなる、うかれ舟

理々

報ひある世や関守の枯芙蓉

帰帆

森の灯を五月の豊の明り哉

理々

朝顔や必隣り刀鍛治

全

露更ぬ而ソ笛鹿の声

春瓜

けふのみぞ哀させもが露の花

理と

燈すなと夕紅や葉鶏頭

雨夕

夕顔や絵師の惚したる藁庇

雲岳井尻 委白

葱や神代の俣の柱立

全松江 清仙

絵襖に蝶の箔置く野寺哉

全字浪 里夕

涼しさの魂は帆にあり峯の月

伯原稻大谷 石羊

綿取や腰のす度の夕間暮

雲岳赤崎 五十野

春日ののむかし男や鹿の声

的羊

寺跡の謎とかけよ郭公

全松江 紅羅

名月や松を世界の鉢の物

兔角

時雨や音に三ッあり志賀の浦

全井尻買入 青風

「(三)オ」

「(三)ウ」

淋しさの捨処なり筥紅葉
川上へ風の流るゝ枯野哉

夕風や波の由良の戸星の舟
山門に入れば酒の香初時雨

吸壳の煙ゆがまぬ暑かな
夜学の燈ゆり直したる時雨哉

落兼る日は枝にあり山紅葉
落栗や数の算るゝ板庇

靱臼の廻る向や鹿の声
放家の燈も曾野原や露の影

橋音の絶て盛りや三ツの花
蚊遣火や月を汚せし片在所

木がらしや一の行場の岩に猿
渡し呼ぶ女小凄き枯野かな

蓮咲や尼歟寝顔の見苦しさ
吹そらし木とより高き落葉哉

牛飼の枕言葉や春の艸
卯の花や求^メても能^キ闇の疵

海へ出て声の替りし野分哉
反橋の反をかくすや五月雨

御鬮乞ふ手に力無^キ落葉かな
川跡の音なき波や蓼の花

陽炎や雲の波間の根なし艸
凧の欲やはなれぬ竹の青

うそ寒うなつて裸の柳哉

伯岳大塚

嵐水

理々 「(四)オ」

雲岳井尻

籟龜

委白

婦帆

蝸脱

嵐水

揚鳥

雲岳松江

冬英

籟龜 「(四)ウ」

宇里夕

如舟

冬英

雲岳母里

度翠

漁陽

其垣

里英

春潮

兔角

湖眼

蝸脱

嵐水

柳蛙

日を盗む物見の松の時雨かな
疑^{ウタガ}ひし髻に罪なし夜の梅

柄に手を組む薄暮や鳴の声
鹿鳴やつくゝ旅の薄衣

漕出して見ても外なき暑幾
地から夜の明る里あり蕎麦花

涼しさや乳房含^メて庭の月
快き峯の渚や厚がすみ

鳶の巢の飽まで古し初桜
爐開や琴を洩たる松の風

吹たびに己が根を掃く柳哉
たまゝは鶴も来る池や牡若

旭に向ふ迄のつとめや雪女
五月雨や枕探れば飛ぶ蛙

長生^キも恥にはならぬ水室哉
葉の意地を花の有る薊哉

奈良へ行人は苦もなき時雨哉
薺や手よりも白む昏捨ひ

夕貞や背に星移る洗ひ牛
梅咲や炎繩借合ふ竹輿隣

まだ寒し一重椿の朝日影
葛堀りのほり出す春や初桜

取わかぬ雲の行衛や崩魚梁
盲目の指す方や薺の梅

水晶の種と答よ今朝の露

伯岳安田女

石羊

揚鳥

雲岳安田女

寿和

全井尻

楓里

伯岳米子

一枝

全井尻

籟龜

雲岳大塚

樹南斎

全井尻

五雲

江戸

里秀

雲岳久伯

里曉

宇里夕

其英

雲岳久伯

衰水

全安田

魚文

伯岳小原

画山

里夕 「(六)オ」

里夕

伯岳米子

冬英

雲岳小竹

花暁

全松江

里英

雲岳小竹

冬英

全松江

金蟻

全松江

聞柳

雉鳴や見上る岩の恐しき

伯岳大谷

名月や曇は海の舟筏

雲岳安来

昼顔や笠へかくる、影法師

魚文 「(六)ウ」

我影を抱籠に川の涼かな

的羊

款冬や名歌の残る水の味

雲岳松江

稻妻や二度に教へし道しるべ^(濁マ)

蓑水

宇治川や五月の闇は闇の空

全赤崎

偷^(濁マ)折る罪に雅もあり垣の梅

松風

首^(濁マ)だけははまる心の雪見かな

其垣

石山もたゝめは軽き扇かな

伯岳米子

枯果る艸の継や石路の花

孝鳥

凧や嘶高き生駒山

雲岳松江

水底の海士も浮ぶや雉子の声

知友

寒菊や九寸五分にも名^(イ)の物

春潮

片足の踏皮の行衛や藪の花

備中松山

隠家の夢の余^(イ)歟合歟の花

碩鼠

稲妻や無事で戻りし渡し舟

委白

入相に昇る日もあり蔦紅葉

伯岳米子

藪入や髻に障りし藁庇

的羊

鹿鳴や物うき須^(イ)廣の浪の音

其垣

夕顔や拙く咄す^(イ)在処口

菅笛

夜は森の陰にかくる、月見哉

雲岳荒鴨

旭に月を預^(イ)て戻る涼かな

全母里

塩釜や自らぬるむ潦

備中松山

左遷の哀触行千鳥哉

嵐岳

白川も名斗り白し五月闇

雲岳安田

夢飛んで跡のしら波遠確

里夕

松に来て染ぬ時雨の思ひかな

歌友

夕顔や囉ひ乳程の露の恩

春紫

文字消へし下馬の辺^(イ)りや梅の花

隄江

昇る日は櫃の玉なり八重霞

春潮

卯の花や黄昏^(イ)遅き尼が窓

仙菓

古池を野の黛や夜の雪

籟龜

鴛鴦も来てくらぶ^(濁マ)べき花野哉

籟之

日の結ぶ水幼なし岩の霜

如舟

踏足の音を明りやし五月闇

春潮

日面の垣に夢あり春の雪

楓里

花を産む山や霞の岩田帯

仙菓

浦漕やむかしも斯る霧の朝

籟龜

飛んで火に入^(イ)る魚もあり岸紅葉

楓里

早稲の香を誰が知らせてや渡^(イ)り鳥

印水

忘れぬ夜や山鳥の肌寒み

春瓜

家と見へて坂あり岩つゝ、じ

五雲

解るなら薬の水ぞ花の雪

寄盛

手みやげの軽さを誉る螢哉

芦笛

暑哉誰が寝婆も捨筏

流

日の責^(イ)をのがれて怒る眼皮哉

漁陽

瘦ながら膽は逞し番椒

春波

子^(イ)を持ぬ気俣ぐらしや黄鸝頭

蚊子

市舟の戻^(イ)り際よし後の月

里夕

日を追ふて我影暗き雲雀哉
蝶この土に喰入る葦かな

垣も脱キかへて卯の花衣哉

藪陰の私星や枇杷の花

五月雨や寝ほれ顔出る笹の間

下艸は露に乏しきばせを哉

一寸の艸にも五歩の花野哉

蝉鳴やし下リ行水の煮る音

春雨や隣の欠レ借居ぬ

我家を翌スの花見の旅寝哉

風呂もなき宿事足りぬ時鳥

淋しさの底をたゝくや椎の雨

己が身の伊達に狩らるゝ蚩哉

篠原や墨にも染メず枯尾花

世のさまは松に残りて枯野哉

白雨や川音迄も雨宿り

淋しさに齒ゴたへの有添水哉

川水の眼にさへぎるや初紅葉

待宵やまたるゝ恋はよその闇

朝霧や海の中より摩耶の鐘

涼しさや行つかぬ間の苔清水

初ノや空に墨絵の松の声

山寺や残りし客は鹿の友

青柳や雲井の外の上ノ童

松の月逢ふ夜惜しまぬ曇かな

蝸脱

井蛙

金蟻 「(九)オ」

冬英

漁友

春潮

如舟

金蟻

漁陽

風吟

帰帆

深艸

嵐水 「(九)ウ」

聞柳

兔角

丸山

其英

冬英

蝸脱

嵐水

理々

雨夕

冬英 「(十)オ」

蝸脱

理々

みじか夜や朝日のしめす石燈籠

岩国の処最眞や橋の月

山吹や由緒の残る長者跡

白雲の名も是程や桜の実

焼塩のむかし慕ふや五月雨

腐りたる艸の花見や夜の橋

蝉鳴や物のわびしき古戦場

石垣の時代蒔絵や苔の花

右額面

元之巻

咲ぬ木も夢の栄花や藤の花

昼顔やいかにも花の男伊達

夕立や空に宮車の過る音

吹ぬ日は嘶キ溢す桜かな

鹿鳴や我身の因果物語リ

振袖に欲の余りし汐干哉

松原は片輪車の日傘かな

窓くゞる嵐の骨や鹿の声

何某も読メぬ梵字や苔の華

罌粟ケ咲や物干竿も女コ竹

眠蔵の折かけ垣や枇杷の花

鯪に惚れて切レたる風の尻

入月の一村早し山若葉

高安の留主の友なりきりレす

孤鸞

冬英

其垣

孤鸞

仙菓

籟龜

全

其英 「(十)ウ」

帰帆

春紫

青蛙

湖眼

五雲

碩鼠

帰帆 「(十一)オ」

丸山

里夕

全

揚鳥

金蟻

春朝

春紫

八景も一ツに飯したる雪見哉

青風

瀧坪へ飛込む後の暑かな

春瓜

城跡の無念を握る蕨かな

丸山
「(十一)ウ」

山寺や落葉の中の懸り舟

春歩

古郷の雲はいづれぞ鹿の声

風吟

昼顔やしばし横たふ渡し舟

里英

澄みや月狐迷わむ諏訪の湖

雨夕

月夜にも懐き芭蕉かな

柳瀧

岩の鶉の水へ逃る、時雨哉

風吟

春雨や咄しの底を探り題

其英

川舟の川に凍_テ付暑かな

風吟

梅咲や日の堀出す川原石

春潮

松陰へ来ても脂ある暑かな

石_石吟風
「(十二)オ」

垣にのみ残る長者や金銀花

宇_宇里夕

孫を見に行枝軽し梅の花

湖眼

衣_衣ぐや猶余りある猫の恋

其垣

影洗ふ月の器や鴉の湖

金蟻

日の絞る雪を乳房や春の舛

春潮

昼顔や水を尋る船揚り

風吟

雨の夜の月の雫歟飛ぶ螢

隄江

雉子鳴や水に点頭く朝の月

的羊

日の艶の地に満_子渡る紅葉哉

雲_雲筋_筋松江_{松江} 簾雨
「(十二)ウ」

山柅でさへ花咲をほと、ぎす

金枝

撞腦の脱拾ふや土用干

雨夕

上見ぬを己歟操や百合の花

其英

裏枯や水に声ある渡し舟

芝睡

五月雨や抜_テ道を知る池の魚

魚測

若葉哉月夜忘れし谷の庵

春潮

晚鐘の春を移せし若葉哉

蝸脱

鋸屑と見なす蘇鉄の霰哉

仝

弓取の心だめしや竹の雪

委白

寒梅や雪した、かに杖の跡

魚文
「(十三)オ」

筍や畑境のみほつくし

金蟻

麦蒔の□も枯_レたり一時雨

椿子

初雪や柳のもとを桜狩

春紫

苅_ル人としらで招くや村尾花

風吟

下馬にたなびく雲や藤の花

宇_宇里夕

月に咲旭に散や三つの花

其英

飛ぶや馬繫ぐ木もなし花の山

五十貫

神垣や夜昼燃す梅柘榴

峨景

岩間行水に雲無_キ若葉哉

雲_雲筋_筋 春潮
「(十三)ウ」

鼻に日のさし入_ル迄ぞ遠雲雀

紅羅

苅_テ又雨の種まくしぐれ哉

歌友

潔_キのは初日清_キは月今宵

我水

御代の風実にも五日の幟哉

舎鳳

亨之卷

置霜の白きを誉よ池田炭

金枝

星瘦て松風暗し鹿の声

雨夕

唐崎や寝ぬ夢惜む春の雨
 玉簾の内のひかりや入梅の月
 火灯の面影残る鹿驚かな
 懸て干せ塩馴衣花袴
 在し世を抱籠に問へん尼が肌
 妻乞ふや我恋艸はもしほ艸
 垢抜ケし物は世になし蓮の華
 馬の背に柳のハル小雨かな
 煤払や汚れぬものは鶏の声
 時雨る、や昼を化名の一ツ松
 日の長ケを日こに見せるや春の艸
 何鳥の潜る簾や糸柳
 撞く内に虫は黒し暁雲
 兼言の浅キ契りや春の雪
 汐待の欠ヒも長き夜明哉
 信濃路の雪の初めや蕎麦の花
 萩咲や隣（隣）つからの御垣守
 起て見よ雪の初瀬の暁雲
 水上の風をしらせし落葉哉
 遁れたる枕折よし時鳥
 涼しさや唐を隣の浜屋敷
 終に雨知らぬ葉もある芭蕉哉
 花梨子や雨夜に月の別世界
 初霜や踏馴レた地も旅心
 飛雲に踏扱さる、菓かな

梅々園英千編『烏帽子親』（伊藤善隆）

的羊
 仙菓
 委白 「〔十四〕オ」
 理々
 仙菓
 蝸脱
 孤鸞
 的羊
 如舟
 蝸脱
 籟龜
 如舟
 里英 「〔十四〕ウ」
 仙菓
 兔角
 隄江
 理々
 蝸脱
 春潮
 和風
 簾雨
 風吟
 全 「〔十五〕オ」
 兔角
 青風

星合やし木とのあらしを机
 涼しさや月の枕の潦
 舟長サの月酌分ル夜寒哉
 空寒し浪の崩る、浮寐鳥
 若艸に雨の色見る野守哉
 更科の月は隙なり落し水
 水絶て牛追戻す暑哉
 一類リ闇の雫や磯千鳥
 山は覚メ人はうつ、や春の雨
 葉の錦水の着て行寒哉
 道間へば風のうなづく鹿驚哉
 木がらしや池に際だつ松の色
 桃燈も消へて拾ふや雨後の月
 日に眠る松の野歟蟬の声
 日の知らぬ花も涼しや在所寺
 露を積む舟は一葉や朝朗
 古寺や世をからびたる枝の月
 名月や落散る文の恥かしき
 沖の燈は木の間の月歟霧の海
 蘭の香やひそかに忍ぶ窓の月
 桂男の言問ふ露の艸葉かな
 水鳥の遊びに近き田植哉
 菜の花や村の富貴はいわぬ色
 古寺の窓の風守るはせを哉
 月涼し波を枕にかけ造リ

嵐水
 柳蛙
 冬英
 玉水
 嵐水
 里風
 的羊
 仙菓 「〔十五〕ウ」
 里英
 魚文
 籟龜
 的羊
 嵐水
 委白
 嵐水
 嵐山
 其英
 里風 「〔十六〕オ」
 春潮
 嵐水
 花眺
 孤鸞
 舍鳳
 嵐水
 鶴子

五五

朝顔や傾城町の寝静り

漣なみに小と波画く千鳥かな

昼顔や星の溢る、川原道

初雪や麓はいまだ雨の音

しぐる、や後は月の鏡山

木がらしや月の宿りし瀧見堂

寝る舟へ通ふ螢の雪吹かな

菊咲や田舎訛りの客も有り

梅咲や旭の洗ふ雑煮椀

葉柳や月のそれたる谷の庵

暗がりの峠偽る螢かな

夕照の池に残りし真萩哉

又六が杉の青さよ梅の花

利之卷

一山の昼寝初めや蟬の声

空になき窓の曇や今年竹

一日の隠家となる芭蕉哉

鶯よなぜ来て鳴ぬ後の雛

名月や留守守斗り雨の夕し

白菊や是も机の雪明り

名月や小暗き声は塔の鳩

空蟬の擣つて秋去り衣かな

せめ機に日を継ぎ足すや花卯木

昇る日に消へぬ雪あり蕎麦の花

城跡のむかし忍ぶやかんこ鳥

如舟

衰水

柳蛙 「(十六)ウ」

魚文

花暁

里英

全

嵐水

委白

孤鸞

春瓜

松風

金蟻

「(十七)オ」

松
芦笛

里風

委白

籟之

婦帆

籟之

峨眉

蝸脱

婦帆

柳蛙

兔角

「(十七)ウ」

青柳や青きを己歟唐衣

枯柳さそふ水待つ姿かな

孤家の朝寝をかくす若葉哉

瀬田の名を東へ奪ふ紅葉かな

涼しさや舟には人のうき寐鳥

夕顔や姥が手際の藁庇

馬で来る人を笑ふや雪の梅

凧たこや一重高き峯の塔

口解けぬ風の袋敷雲の峯

から堀へ身を浮橋の涼かな

名月や嵯峨より嵯峨の旅衣

香の凶の煙る雪解や園の梅

音も無く香に知らる、や蘭の花

鶴亀の声射場にあり春の雨

施花や浜辺は昼の天の川

東雲の朱あまを奪ふや初茄子

雨の日も声は曇らぬ田植哉

解き捨るもの、手本や笹粽

転寝の己を叱る夜寒かな

欸冬や川は名にふる寺の跡

涼しさや風漉直す浜の月

帆柱の力見へけり初あらし

鶯と二人家内や梅の庵

春雨や木食寺の昼の夢

安
里夕

伯
法勝寺
旧蟻

今
御来屋
梅山人

嵐水

楓里

籟龜

文虹

玲々

婦帆

嵐水

委白

風吟

如舟

委白

倭雞

風吟

渭北

芝睡

兔角

似教

的羊

其垣

深艸

松
芦笛

兔角

「(十八)ウ」

「(十八)オ」

雲に入^ル鳥地にも入る潦

葛水や茶碗の内も雲の峯

我と我魂に追はる、枯野哉

朱を含むみな古筆の木の芽哉

涼しさや魚の貫く人の陰

初^ノ尸の哀を溢す雨夜かな

献立の具に書込し鶴舟かな

野鴉の声人馴てむめの華

火を帯て水に親しき螢哉

左^ノ迂の枕濡すや鹿の声

花罌粟の虹立上や夕煙

一燈の誓ひ見へ鳧藪の梅

鳴や蟬日和の中の時雨哉

浪かれて狐の渉る寒さかな

蟬鳴や此森陰の捨火繩

明日ありと思ふ氣は無し花の山

干魚の魚に戻るや五月雨

遠騎^{シホテ}の鞍に乘るや花の兄

船方の嚏に馴る、衛かな

名月や朝日を乗^テて戻り舟

雉子鳴や障子を洩る岸の風

星清く四方に声あり樹この秋

手枕に初て涼し海の月

春雨や沁る茶釜のひとり言

五月雨や蟻の産る、砂糖壺

春瓜

雲霧松江 芦笛

金蟻 「(十九)オ」

井蛙

冬英

安水

伯嘉法勝寺 蝸牛

其垣

蓑水

漁陽

嵐水

安水

委白 「(十九)ウ」

籟龜

春潮

伯嘉茶子 臨志

冬英

春瓜

石羊

孤鸞

春潮

簾雨

石羊 「(二十)オ」

松 芦笛

仙菓

貞之卷

梅咲や旭の作る錦川

冬枯や鶯の見扱す麓寺

岩に浪月の花散る涼哉

水底に雨を溢すや蟬の声

爐の炭の香も物深し嵯峨の庵

月を花に封じ返すや尸の文

水底に動く岨あり雉子の声

青嗅き飯盛る宿や杜宇

名月や算^ミ覚へたる橋の板

幻や霞の底の川けぶり

うきしらぬ左^ノ迂舟や夕涼

時雨るや摩耶へ逃る、夕附日

名月や井筒は闇の有^リ処

鹿鳴やまだ夜^ノの残る神の森

初花やいぶせき軒の飾^リ馬

音の無^キ波打際や若葉寺

古郷の便りも近し梅の花

睦言を鳴き破る明の雉子哉

親の恩過去に残るや燕の巢

探り得し秋の性根や小夜碓

吹れても散らぬを花の柳哉

己が影声に隠る、雲雀かな

藤波や人を浮藻の寺の庭

朝霧や海の底行水の音

委白

嵐水

春瓜

春潮

其垣

蝸脱 「(二十)ウ」

井蛙

芦淮

椿子

柳蛙

的羊

理々

丸山

簾雨

全

的羊 「(二十一)オ」

里慶

的羊

帰帆

全

蝸脱

全

魚文

伯嘉境 画羊

若竹や日々に隠る、捨草鞋
春雨や目に見ぬ雪の大井川
寝過しを雲から起す雲雀哉
榎咲や東マからげも京遁れ
朝風の菌茎を見せる野梅哉
鹿鳴や幽に更る祠の灯
主のある捨小舟かな夕涼
雲と見て醒ぬ日和や雲の峯
独居て物騒しき暑かな
鹿鳴や又置直す机
蝉鳴や屢沈む松の音
羅^{ワッセモ} や世界此日を治遊初^{ダゲテ}
迷ひ路や孤村に満秋の色
卯の花やまだ宵ながら朝朗
涼しさや一木を洩る、海の皺
夜嵐の酔て戻る確かな
初霜や目に立闇の一ツ橋
杜宇仰^{ツバ}ば岑のあらし哉
日の本の風と覚へぬ涼哉
吹戻る風に艶あり若葉山
野晒しの仏黒むや蓮の花
瀬を落る船を見習ふ燕かな
枯てさへ今に名の立つ柳哉
短夜や四五景残る夢の旅
時雨るや沈んでは浮く竹生嶋

楓里
「(二十二)ウ」
魚文
雨夕
其垣
簾雨
楓里
金蟻
冬英
丸山
蝸脱
「(二十二)オ」
簾雨
的羊
春紫
春潮
深艸
楓里
全
春潮
楓里
我水
「(二十二)ウ」
籟龜
嵐水
籟龜

騎拔^ケて跡見帰るや春一夜
日々に出る日の珍らしや五月空
片山は鳥の詠^カや霧の海
暁の風の雫歟^シ桐一葉
陰涼し松に命を繁^キ馬
折^マの目を囉ひ乳や帰り花
遠近の風汲^ミ分る薄かな
鹿鳴や更て火を乞ふ孤^ツ家
鶯の勒^レ来りや年の関
白魚や水の底にも山かつら
星の寝た枕香もある真桑瓜
卯の花やまだ夜深^キに明鴉
是に花あらば^レと柳かな
水仙やさながら窓も塞がれず
時なる哉。滑稽のさかり盛んなる八隅の外までも普
く睦び、呉越も皆兄弟なるをや。晋子に祝鮓が佞な
く、諸句すら兄弟の因みをなせり。されば此比凡辺
に遊婦友どち志をあはせて一ツの願を起し、遠き国
と近きわたりの雪月花鳥の喩詠を勧進して予に羸輪
を訂させ、国に名だゝる大悲の「(二十四)オ」宝
閣へ捧奉り、猶^レ余んの佳詠をともし一小冊と
なして桜木に咲せ、言花の匂ひを深くせむと責ら
る。やをら^チが魯鈍宋野に株を守の属ひ、何がな
はのよしあしを分ちてんやと固辞すれども、許れね

魚洩
帰帆
委白
春潮
安水
簾雨
曲睡
「(二十三)オ」
芦淮
柳瀧
的羊
清仙
渭北
籟龜
春潮
「(二十三)ウ」

ば、出がたくて心の及ぶところの金玉を拾ひ、是な
ん八千坊の翁に」(二十四)ウ)告て序を需む。そ
の烏帽子親の名のみこそいみじけれ。悦びありや
く、山猿の三番叟、めつた舌つゞみを鳴らして、
しりへに書恥つらの赤キ尉。

天明丙とし

梅と園

冬霜月

英千

〔梅と園〕(陽刻)〔英千〕(陰刻)

〔(二十五)オ〕

〔(二十五)ウ〕

願主連名

市川簾雨

葛岡雨夕

嶋田其英

福島免角

田中其垣

枚野湖眼

生田石羊

渡部青蛙

瀬田画山

発起連中

西村籟龜

西谷春潮

秋間嵐水

西谷委白

西村孤鸞

伊達の羊

〔(二十六)オ〕

集校

伊藤理々

永井冬英

角田春瓜

葛岡漁陽

補助

森澤蚊子

大森五雲

小西金枝

多次見風唼

伊達金蟻

秋間楓里

浪華書林

北久太郎町心齋橋

丹波屋傳兵衛

〔(二十六)ウ〕

〔(裏表紙)見返し〕

〔(裏表紙)〕

〈付記〉

本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰の文学・歴史関係資料の基礎
研究と公開方法の開発に関するプロジェクト」(二〇二五～二〇二七
年度、代表・田中則雄)、およびJSPS 科研費基盤研究(C) 22K00327
の研究成果の一部である。

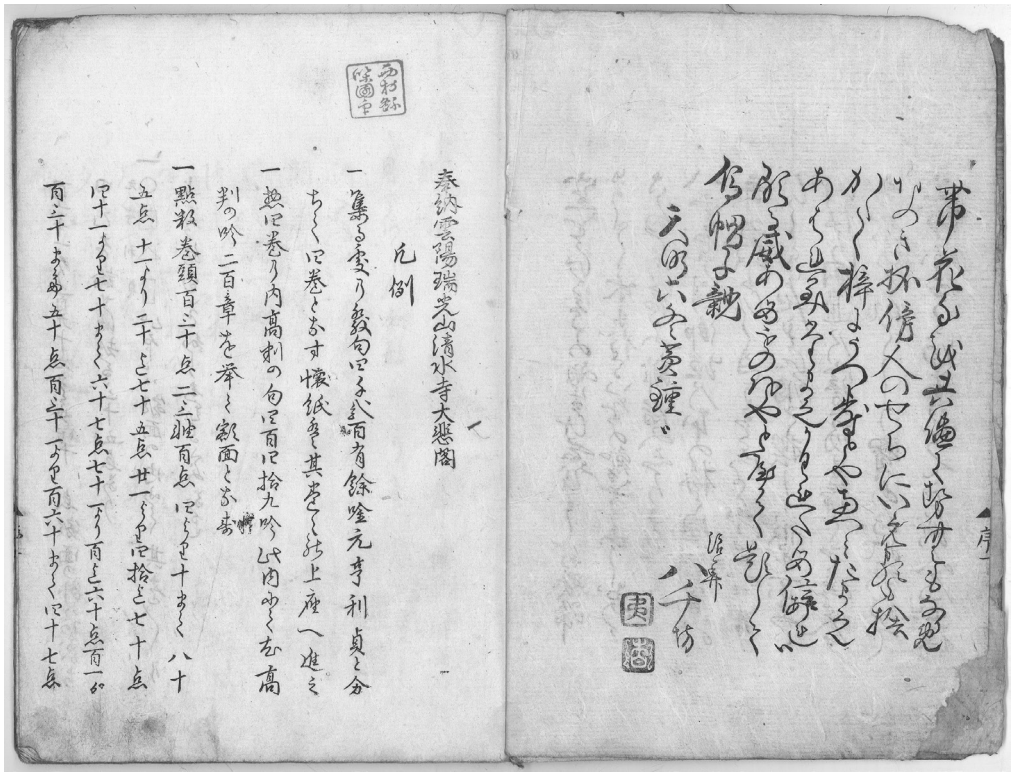
〔図版1〕表紙



〔図版2〕表紙見返し・「序一」才

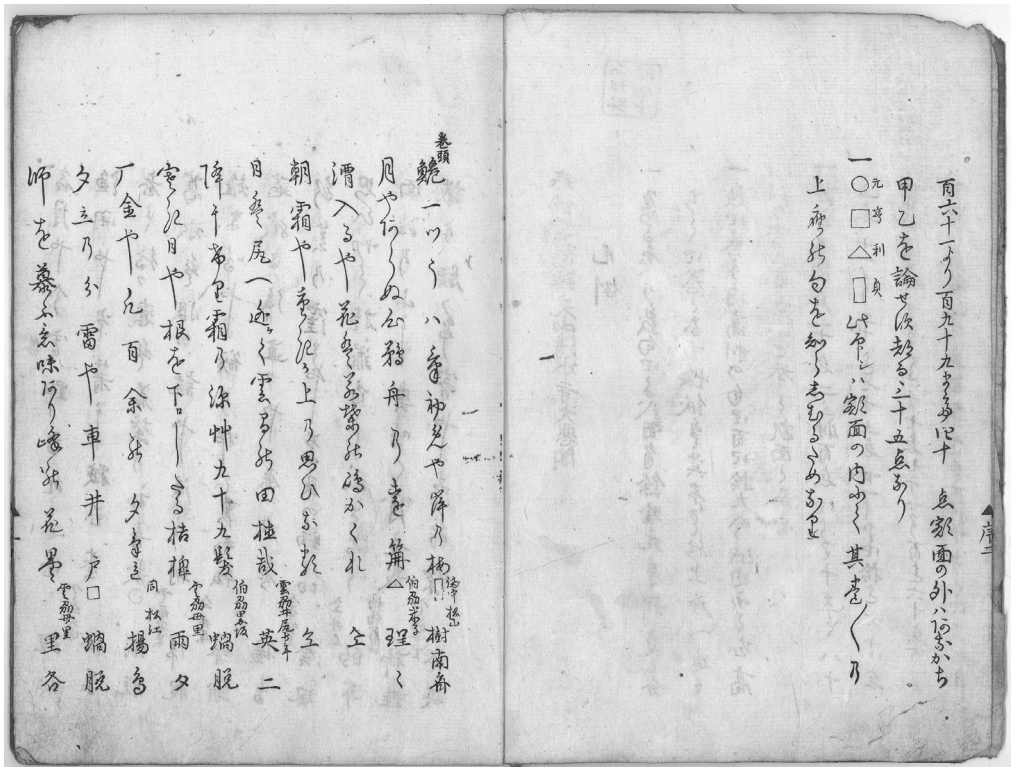


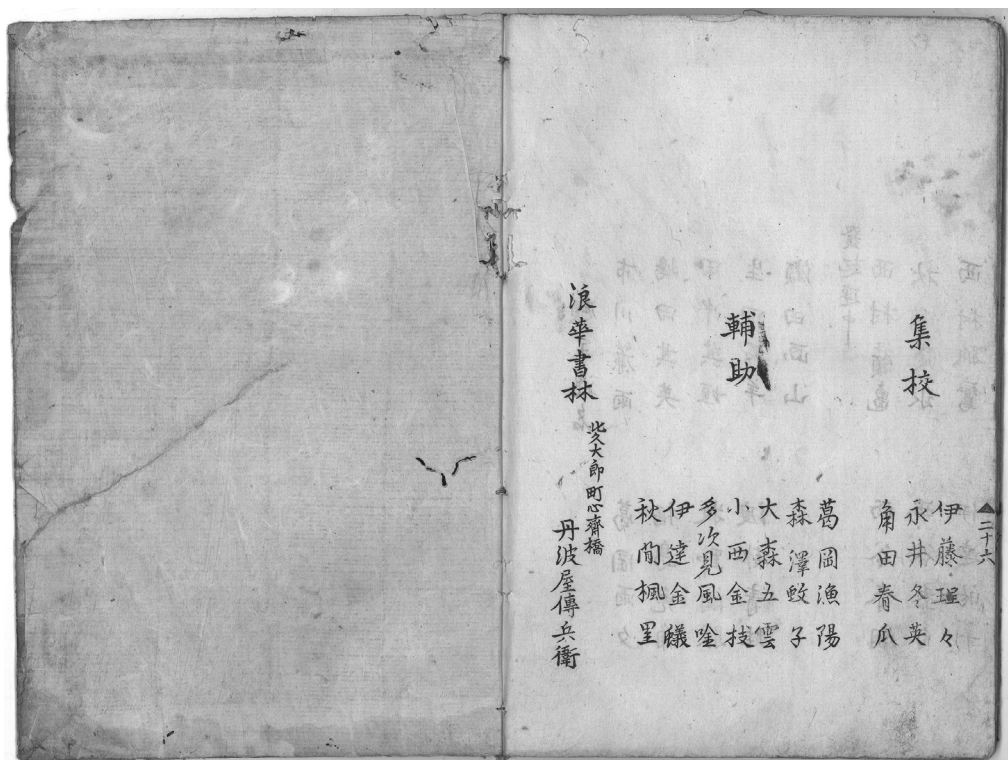
(図版3) 「序二」ウ・「序二」オ (凡例)



梅々園英千編『烏帽子親』(伊藤善隆)

(図版4) 「序二」ウ・「二」オ





Baibaien Eisen ed, “Eboshioya” : reprint and introduction

ITO Yhoshitaka
(Rissho University)

[Abstract]

“Eboshioya” is edited by Baibaien Eisen. Eisen is presumed to had been a disciple of Hassenbo Ihaku, a haikai poet in Osaka. Eisen is a very important haikai poet in Izumo area.

Keywords: Haikai, Hassenbo Ihaku, “Eboshioya”, Baibaien Eisen, Zuikozan Kiyomizudera